

Title	「なにかを言いたいだけなんだ」 : Wise bloodにおける家族と故郷の喪失
Sub Title	
Author	佐藤, 優果(Sato, Yuka)
Publisher	慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人
Publication year	2022
Jtitle	Colloquia (コロキア). Vol.43, (2022. ) ,p.47- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	米文学
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20221215-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20221215-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「なにかを言いたいだけなんだ」\*  
——*Wise Blood* における家族と故郷の喪失——

佐藤 優果

“The Train”から *Wise Blood* へ

1952年に出版された Flannery O'Connor (1925-1964) による小説 *Wise Blood* は、1947年から構想されていた。アイオワ大学のクリエイティブ・ライティングコースの修士課程在学時、学位論文として提出された短編小説群には、のちに *Wise Blood* の第一章となる“The Train”が含まれている。*Sewanee Review* に翌年掲載されたその小説は、主人公 Hazel Motes (以下 Haze) の存在や、大まかな筋は同じだが、*Wise Blood* では Haze の目に関する描写が大量に追加されたほか、兵役時の様子が詳述されるなど、相違点も多い。

相違点のなかでも根本的な改訂が行われた箇所は、Robert Brinkmyere が指摘するように物語意識が同情的な調子から突き放したのものになった点だろう。“... her shift from a familiar and sympathetic narrative consciousness to one that was strident and detached” (*The Art* 100-01)。“The Train”では内気で人に話しかけることがなかなかできない人物として描かれていた Haze は、長編では強気な態度をとるようになる。

He would never have had the courage to come to the diner by himself; it was fine he had met Mrs. Hosen. If she hadn't been talking, he would have told her intelligently that he had gone there the last time and that the porter was not from there but that he looked near enough like a gulch nigger to be one, near enough like old Cash to be his child. (“The Train” 266)

しかし *Wise Blood* における Haze は気おくれせずにはっきりとした物言いをする人物である。上記“The Train”の引用では Mrs. Hosen となっている人物は *Wise Blood* においては Mrs. Hitchcock と書き換えられている。

She said she knew an Albert Sparks from Taulkinham. She said he was her sister-in-law's brother-in-law and that he ...

“I ain't from Taulkinham,” he said. “I said I'm going there, that's all.” Mrs. Hitchcock began to talk again *but he cut her short and said*, “That porter was raised in the same place where I was raised but he says he's from Chicago.” (7-8; emphasis added)

このような Haze の性格変更は、*Wise Blood* において、盲目の説教師 Hawks とその娘 Sabbath の居所を突き止めたり、自分の double である雇われ説教師 Layfield を殺害してしまうこと、また物語の結末で自らの目を石灰でつぶしてしまうといった奇妙な行動を鑑み

---

\* 本論を執筆するにあたって、熱心なご指導を頂いた宇沢美子先生（慶應義塾大学）、大串尚代先生（慶應義塾大学）に心より感謝申し上げます。

ると、必要なものだったと考えられるのである。Brinkmyere は語り手を通した Haze の意識変化を重要視し、語り手のそうしたトーンの変化と物語結末を結びつけ論じているが、本論では、こうした Haze の不条理とも言える行動力が彼自身のいびつな信仰と結びついており、さらにその信仰は Haze が独自に持っているものではなく、家族や南部に起因することに注目する必要があるということを検討する。バイブルベルトである南部に生きる Haze がキリスト教/イエスに囚われた人間であるということは確かだとしても、その事実はあらかじめ自明のものとして考えはじめる先行研究が多かった。*Wise Blood* がキリスト教に関する墮落とその抵抗に関する小説であるだけではないということを示し、もう少し俗っぽく読み直すことが本論の中心的な目論見である。

### 家族のいない若者たち

*Wise Blood* の多くの登場人物の家族は失われ、機能していない。主要な登場人物である、3 人とも十代後半である Haze, Enoch, Sabbath の家族にまつわる記述を見てみよう。

主人公 Haze は幼い頃に第二人と祖父を亡くし、また 10 代後半で両親を亡くしている。“Haze had had two younger brothers; one died in infancy and was put in a small box. The other fell in front of a mowing machine when he was seven. . . . He was asleep now and he dreamed he was at his father’s burying again” (14) . 彼が家族を思い起こすとき、そこには必ず彼らが収められた「棺」のイメージがつきまとう。Haze に関してはくわしく後述するが、Haze が都市 Taulkinham で出会う Enoch と Sabbath もまた、家族に関する問題を抱えている。

母を知らず、父親に捨てられた Enoch はそれでも作中で父の話を幾度となく繰り返す。Talkinham では人々との繋がりを求めるが、それは得られない。盲目の説教師 Hawks の娘 Sabbath もまた、生まれた際に母親によって Sabbath (安息日) の名をつけられるが、母とは死別している。同時に彼女は私生児で、父との結びつきが不安定だということが窺われる。Sabbath は「わたしは行き場がないの」(拙訳 168) という。安息日と名付けられた彼女は、実母を自らの誕生とともに失い、物語終盤で父には捨てられる。彼女は安息の家庭を持つことが叶わないのである。

### グロテスクに変奏される「家族」

以上のように、3 人の主要な登場人物は家族について——家族が失われていることについて——なんらかの表明を繰り返す。そうした表明に、グロテスクな家族の変奏が対旋律として配置される。たとえば Haze が Taulkinham で何度も通う娼婦 Leora Watts は Haze に“‘That’s okay, son,’ she said. ‘Momma don’t mind if you ain’t a preacher’” (30) と呼びかける。Haze は肉欲のためというより、自分は罪を負っていないということを、いわゆるイエスの説く罪を実践することで逆説的に証明しようという独自のロジックで娼婦と関係を持つが、そこには母に関連した繋がりの希求があるかもしれないということが、近親姦じみた表現でのめかされる。

Hoover Shoats によって商業的成功を目論まれ、Haze をモデルとした説教師に仕立て上げられた Layfield は、6 人の子どもと妻を養うために熱狂的な説教を「仕事として」行う。

The Prophet got three dollars an evening for his services and the use of his car. His name was Solace Layfield; *he had consumption and a wife and six children and being a Prophet was as much work as he wanted to do*. It never occurred to him that it might be a dangerous job. (203; emphasis added)

Brinkmyereによると、明らかな Haze の double である Layfield に、Haze はキリストが真実であると確信する自らの一部を見出している。<sup>1</sup>その考えにあらがおうと、Haze は Layfield を殺してしまう。このことについて、Edmonson は怒りと妬みに満ちた Haze が Layfield を殺したことによって彼の道徳的崩壊が完成し、教義を破壊するだけでなく自分が同意しない信念を持つものを一掃しようとしているという (Edmondson 57)。Haze はここで、自分の一部であるイエスを信じる心を殺し、イエスを信じる者を自分の内外で一掃しようとするのである。Haze の道徳的崩壊のきっかけである Layfield が説教師になる要因、すなわち家族を養うという理由がわざわざ書き込まれているのは、注目すべき点と言えるだろう。ここでも家族のイメージはグロテスクさと切っても切り離されない。

作中で家族がグロテスクに描かれた最たる例は、shrunken man を子どもと見立てた Sabbath の態度である。Enoch が Haze の探す「新しいイエス」だと考え、盗み出した博物館収蔵の男のミイラを手渡された Sabbath は、彼に両親の有無をたずねながら自らの子どものようにかわいがろうとする。

She held him up and began to examine him and after a minute her hands grew accustomed to the feel of his skin. Some of his hair had come undone and she brushed it back where it belonged, holding him in the crook of her arm and looking down into his squinched face. His mouth had been knocked a little to one side so that there was just a trace of a grin covering his terrified look. She began to rock him a little in her arm and a slight reflection of the same grin appeared on her own face. “Well I declare,” she murmured, “you’re right cute, ain’t you?” (183)

グロテスクなミイラを可愛がる異様な Sabbath を Haze はけんもほろろに突き放す。当初はミイラは Enoch によってイエスの代わりとして持ち込まれたものだったが、Sabbath によって再解釈されたミイラは、擬似家族の成立のために必要な子どもという役割を与えられる。Enoch によってキリストの代替としてのミイラを見せられた Haze はそれを拒否するが、このグロテスクな家族のままごとにおいても、ミイラは二重の意味で拒絶される。この Sabbath のままごとについて、批評家の Yaegar は以下のように述べる。

Who owns the terror now? As in *Absalom, Absalom!* a son turns into trash and is discovered to be dust all the way down. In this simulacrum of the

---

<sup>1</sup> Brinkmyer, Robert. “Jesus, Stab Me in the Heart!: Wise Blood, Wounding, and Sacramental Aesthetics.” p.81

throwaway child, O'Connor parodies white culture's fetishes and retells the story of its compulsive will-to-neglect. (Yaegar 86)

Sabbath の擬似家族を作ろうとするままごとのエピソードにおいて、子どもをネグレクトしようとする意志が語りなおされているのだとすると、*Wise Blood* においては William Faulkner のような人種混淆の恐怖はないにせよ、いびつな家族の形は依然書き込まれていると言えるだろう。そしてネグレクトの意志は——Sabbath も Haze も、家族を失った子どもたちである——ミイラを抱き上げ、擬似家族の母となろうとする Sabbath へ Haze が拒絶を示すという形で再演される。イエスの代替として持ち込まれたミイラは、こうして彼らの悲しい過去を浮かび上がらせる。

### グロテスクの可能性

ここまで *Wise Blood* における登場人物の家族が失われていること、そして作中でも家族というものがグロテスクに変奏されていることを見てきた。Fred Booting によると、O'Connor の小説では女性のセクシュアリティやアイデンティティ、母性に対する恐怖がゴシック・ホラー的グロテスクな造形で表現されているといい (Booting 161)、*Wise Blood* における家族のグロテスクな変奏は、その派生と見なすことができそうである。そしてこのグロテスクさは、家族の喪失というテーマを強調するとともに、新たな可能性をも孕んでいると言える。Carol Shloss は O'Connor によるグロテスクの使用の可能性を以下のように指摘する。

On the basis of these observations, it seems reasonable to conclude that the effects of O'Connor's use of the grotesque are sometimes not the ones that she anticipated. *To experience what O'Connor apparently desired her stories to communicate, one not only would have to identify with her fictional representation of life, but further, would have to infer the cause of broken absurdities in both fiction and self to be the lack of God.* In the cases at hand, the stories evoke both uneasy laughter and tension. But to say that the ugliness recognizable in them also elicits a sense of theological "mystery" is unwarranted; for in the contexts that O'Connor has created, deformity is ultimately ambiguous in origin. At this point, it is germane to inquire whether O'Connor used the rhetorical strategies of the realistic tradition with a greater certainty of effect. (Shloss 56; emphasis added)

O'Connor におけるグロテスクの使用は、作家が当初目的とした、神性を導きだすようなテクニクを超え、小説をより俗っぽいとも言える人間的な感情の物語へと変容させる可能性を持つ。Shloss の言うように、我々は必ずしも不条理な展開を、神の欠如を理由とすることを自然とは思わないだろう。Paul Giles の指摘にもあるように、O'Connor がエッセイや書簡で簡潔に説得力を持って書く美的な理論から、彼女の作品自体はずれていくこと

がある (Giles 364)。 *Wise Blood* では家族を失った若者たちの悲痛な叫びが作品のグロテスクな要素に宿っている。

### Haze の場合——家族由来の「イエスへの執着」

*Wise Blood* における「家族」という表象の重要性を概観したところで、主人公 Haze についてより詳しく見てみよう。まずは Haze のイエス/キリスト教への執着が家族、特に祖父と母に由来していることを吟味する。Haze はイエスを信じていないどころか、執着するあまり、イエスを題材としてなにかを——ままたらな人生への不満のようなものを——語ろうとする。ただしそのイエスへの執着は、彼自体が選んだものではないことを踏まえておく必要がある。

Haze は幼少期から車で 3 つの州を巡回する祖父に影響され、説教師になろうと考えていた。18 歳になり兵役に行った Haze はそれでも説教師になろうと思いつけ、兵役で片足を失ってもよいとすら考えた。なぜなら説教師には足は必要なく、彼の首と下と腕にその力が宿るとかんがえていたからである (15)。祖父の視点からも、孫である Haze が自分に似ていることに気づき、だからこそ彼に厳しくあたっている節がある。自分にそっくりな孫の顔が己を「嘲って (mock)」しているように感じ、孫に厳しく当たってしまうのである (16)。Haze が Taulkinham で車を購入する姿は説教師であった祖父の姿を無意識に反復しているように見える。

この祖父がそうであったように、Haze の母もまた、狂信的な人間である。Haze が徴兵されたとき故郷から唯一持っていったものは黒い聖書と母の眼鏡であった。

The only things from Eastrod he took into the army with him were a black Bible and a pair of silver-rimmed spectacle that had belonged to his mother. He had gone to a country school where he had learned to read and write but that it was wiser not to; the Bible was the only book he read. He didn't read it often but when he did he wore his mother's glasses. *They tired his eyes so that after a short time he was always obliged to stop.* (17; emphasis added)

本作では、結末で Haze が自ら盲目になることにもつながるように、「目」は重要な意味を帯びる。前述したように“The Train”から *Wise Blood* への改稿にあたって「目」に関する描写は多数追加されていることからそれは明らかであろう。Haze が母親の眼鏡で聖書を読む姿からは、Haze が特に聖書に関しては母親の思考を受け継いでおり、それが文字通り彼の目を疲れさせているのが読み取れる。また、母親は狂信的な性格から、Haze を折檻することがあった。以下の場面は家にかえってきた Haze がなにか罪を犯したことを感じ取り、詰め寄る母親の姿が描かれている。

She had a cross-shaped face and hair pulled close to her head. He stood flat against the tree, waiting. She left the washpot and came toward him with a stick. She said, “What you seen?”  
“What you seen?” she said.

“What you seen,” she said, using the same tone of voice all the time. She hit him across the legs with the stick, but he was like part of the tree. “Jesus died to redeem you,” she said.

“I never ask him,” he muttered. (59)

ここで、「何をみたのか」と棒を手に三度同じ質問をする母は——彼女は Haze が見せ物小屋でみだらな女性の身体を目にしたことを知らないにも関わらず——若い Haze に罰を与える。子ども時代の Haze は次第に自ら小石を靴の中に入れ、自分を罰するようになる。こういった自罰的行為は、Haze が盲目になってからも再開される。Yeager はクリステヴァを引きながら、オコナーが描き出した、Haze にとってはおぞましい女性の姿が、彼に影を落とし続けていることを指摘する (“The Woman” 111)。母の名前は、短編 “The Train” では “Annie Lou Jackson” (“The Train” 263) と明らかになっているが、*Wise Blood* では母の名前は削除されている。より抽象化された「母親像」は、狂信的キリスト教信者として Haze の信仰に影響を与えるとともに、しかし Haze にとっては母は母であるという事態を明らかにしている。母親が早くに亡くなってしまったという喪失感は、彼の一目奇妙にも思える数々の行動を引き起こしていると言えるかもしれない。Haze の、死んだ母の一部である眼鏡を用いた、喪失感を埋めるかのような行為の果てに、しかし彼は盲目になってしまう。家族はすでにこの世にはなく、Haze は彼らから抜け出し自立することもまた不可能なのである。

### 南部という土地

Haze の信仰への執着は、南部という土地とも深く関係している。イエスという従来のシンボルを否定し、“Church Without Christ”をうたう Haze の中にも未だ南部という土地の残滓は消えていない。

Sabbath に自分は私生児だと Haze が告白される場面をみてみよう。自分の教会は私生児であるなしを問わないと説いてきた Haze が、私生児は救われないのでは、イエスは嘘つきではないか、と自分の疑念に気づく場面である。

He looked at her irritably, for *something in his mind* was already contradicting him and saying that a bastard couldn’t, that there was only one truth—that Jesus was a liar—and that her case was hopeless. She pulled open her collar and lay down on the ground full length. “Ain’t my feet white, though?” she asked raising them slightly. (120; emphasis added)

ここで書かれている “something in his mind” は南部的な価値観と結びついているかもしれない。Coles が述べるように、O’Connor は南部の様々な社会的問題にアプローチしており、<sup>2</sup> “Good Country People” の主人公 Hulga のように、南部の女性として適格な存在ではない女性——家庭を持たず、大学に行き、信仰も持たない、みなりにもあまり気を配らない女性——は O’Connor 作品において度々描かれる。作中で不恰好と描写される Sabbath は、

---

<sup>2</sup> Coles, Robert. *Flannery O’Connor’s South*. p.19

Westling が示すような Southern Belle とは言えない社会不適合な女性<sup>3</sup>のひとりである。Sabbath に私生児だと告白された Haze は、自分の教会は私生児であろうとなかろうと関係ないと考えていたはずなのに、私生児は救われないと考えている自分に気づく。ここで書かれている“something in his mind”は南部的な価値観と言えるのではないだろうか。Robert Coles が述べるように、O'Connor は南部の様々な社会的問題にアプローチしており (Coles 19)、“Good Country People” (1955) の主人公 Hulga のように、南部の女性として適格な存在ではない女性は O'Connor 作品において度々描かれる。不恰好な Sabbath は、Westling が示すような Southern Belle とは言えない社会不適合な女性 (Westling 146) のひとりである。

南部という土地に由来する、もうひとつの特徴を検討してみよう。Haze は自分がプロテスタントだと作中で述べる (102)。Ralph C. Wood は Haze の提唱する教会には彼自身しかいないということを指摘している (Ch.5)。W. J. Cash が指摘するように、ピューリタンの南部人が求める神は個人主義者のための神であり、説教者は“silken priests” (Cash 56) ではなく民衆から立ち上がる者である。

ところが南部人の宗教は、ピューリタンの特性をうけて、信仰は極めて個人的なものであり、神との関係はあくまでも彼個人が神と対峙し、己が魂の救いを反省熟視することである。救いは究極的には、教会とか司祭によるものではなく、あくまでも彼が追求し獲得すべきものである。(柳生 159)

柳生が述べるような南部のピューリタンの個人の救済を目的とした信仰という特徴は、誰も引き込むことのできない“Church Without Christ”を叫び、自分の救済のために突っ走る Haze そのものと言えるのではないだろうか。

ここまで Haze の信仰は家族、そして南部という土地に由来していることを見直してきた。このことから、*Wise Blood* がキリスト教に関する墮落とその抵抗に関する小説であるだけではないということを読み取ることができるように思われる。Haze は家族と故郷の喪失を抱えながら、家族と故郷に由来している要素である信仰をどうにか手段とし、現実と戦おうとしているのだ。

## イエスへの失望

小説冒頭、Haze は軍隊で買春をする仲間たちの間で暮らし、仲間たちの言う「魂などない」という言葉を Haze は信じるようになる。“He took a long time to believe them because he wanted to believe them. All he wanted was to believe them and get rid of it once and for all, and he saw the opportunity here to get rid of it without corruption, to be converted to nothing instead of to evil” (18) . 罪は犯すまいともがく Haze の態度は折檻をする母親から植え込まれたものと言えよう。除隊後、故郷で荒れ果てた生家を確認し、母親が大事にしていたタンスに Haze は“THIS SHIFFER-ROBE BELONGS TO HAZEL MOTES. DO NOT STEAL IT OR YOU WILL BE HUNTED DOWN AND KILLED” (20) .という文言を残す。故郷と家族を失った

---

<sup>3</sup> Westling, Louise. *Sacred Groves and Ravaged Gardens*. p. 146



Haze は、Taulkinham 到着後、“I ain’t any preacher” (27) と祖父との繋がりも自ら否定する。

Taulkinham は神を無視する現代的な都市として描かれている。Jonathan D. Fitzgerald が “A crowd gathers not for community but for movies, freak shows, and salesman” (Fitzgerald 31) と提示する通り、Taulkinham では道端で皮むき器を売るセールスマンと道端で神の存在を説く説教師は同じようなものとして描かれる。イエスを信じることをやめた Haze は Taulkinham にたどり着いてしまうのである。この街では “I ain’t any preacher” (27) と否定した Haze と違い、Hawks ら他のいわば偽善的説教師は自分は説教師だとすぐに名乗りを上げる。すなわち Haze は偽善的な他の説教師よりは幾分ましであるという対比が行われている。

Haze は盲目の説教師 Hawks に出会ったのち、自ら preacher と名乗り、Church Without Christ (キリストのいない教会) をうたいはじめる。Hawks が盲目の説教師を騙る詐欺師であることを暴き、Layfield を殺した Haze は警官の誘導によって車を失ったのち、自ら目をつぶす。その後、同情を寄せた宿屋のおかみ Mrs. Flood の求婚を静かに逃れ、屋外で倒れる Haze をまともや警官が殴り、彼は最期を迎える。

She sat staring with her eyes shut, into his eyes, and felt as if she had finally got to the beginning of something she couldn’t begin, and she saw him moving farther and farther away, farther and farther into the darkness until he was the pin point of light. (236)

Haze を理解できなかった (が魅力は感じていた) Mrs. Flood が盲目の Haze を摸すかのよう  
に目を閉じると、光が見える。ここでなぜ Haze は細い光として立ち現れるのか。

ひとつには Haze の fundamentalist hero としての誕生が祝福されているということが言える。*Wise Blood* の narrator は Haze が祖父と母のような fundamentalist になることを期待している視点を持っていると Brinkmeyer は述べる。

In Haze’s physical destruction and spiritual rebirth, the narrator means to celebrate Haze’s emergence as a fundamentalist hero- as one given entirely to Christ. But also at work in Haze’s story are dynamics that call into question the fundamentalism underlying Haze and the narrator, particularly the limits and rage of the monologism that underpins their visions. (Brinkmeyer 107)

確かに、小説冒頭で家族と故郷の消失を面前にした Haze が Taulkinham に辿り着き、イエスへの失望を穴埋めするようにもがくという、裏返しの意味での狂信さを持った fundamentalist hero の誕生を O’Connor は評価しているのかもしれない。しかし Brinkmeyer の言うように、Haze の fundamentalist の一面は同時に懐疑され、彼はこの言葉のうちにとどまる人間ではない。Feely はオコナーが現実を理解することが難しくなった、疎外された人間の姿を描き、また人の精神的な疎外に最も関心を持っていたことを指摘している

(Feeley 55)。これをふまえるならば、イエスへの失望に対峙する Haze の姿だけでなく、属する場所を失った Haze の抵抗それ自体に着目する必要があるのではないか。

### 信仰に似た何か: 抵抗の手段

第二次世界大戦から帰還し南部南に戻った Haze と南部の外側とを行き来する人々はどうしても理解し合えない。Haze は Taulkinham でも出会う人出会う人とちぐはぐなコミュニケーションをとるが、南部の外側へ向かう人びととの会話は特に際立ったものである。Haze と電車の中で出会う、フロリダに住む子どもに会いに行く Mrs. Hitchcock は失われた故郷を訪問したばかりの Haze に“I guess you’re going home” (4)、“there’s no place like home” (5) と繰り返す。また、イエスについて話す Haze に皮肉に応答する東部の女性の声は“poisonous” (10) と描写される。

“Do you think I believe in Jesus?” he said, leaning toward her and speaking almost as if he were breathless.

“Well I wouldn’t even if He existed. Even if He was on this train.”

“Who said you had to?” she asked in a poisonous Eastern voice. (10)

イエスを信じていないと言い張る Haze とは対照的に、女性はイエスをはなから気にかけてすらいらないようだ。このような Mrs. Hitchcock、そして Haze の最後を見守った Mrs. Floodなどを normal character、Sabbath, Enoch, Haze, Hawksらを freaks characterとして、Feeleyは二つのキャラクターグループを対比させて論じる。Normal characterは我々読者と言い換えることもできるかもしれない。彼女らは Haze を理解できないながらも同時に魅力を感じている。

Wise Blood is an extreme treatment of alienated man’s search for “home.” The reality of belief is so strong in Hazel that he is unable to uproot it; therefore, to live comfortably with it, he must transform it into a shadow of reality. He is unable to deny Jesus the divine Redeemer, so he forces himself to create a shadow without substance, a “new jesus” who has only the name and not the power of a Redeemer. (Feeley 61)

Feeleyの述べるように、*Wise Blood*は疎外された人間が“home”を究極的に求める小説である。家族や土地によって植え付けられた観念を Haze は拭い去ることができないが、それを受け入れてくれた home は今や存在せず、彼は現実を影に変えてしまう方法しか持たない。このような自らに植え付けられた価値観と戦う姿、fundamentalist hero というキリスト教的な役割だけではない彼の抵抗こそが、我々読者 normal characterを魅了する Haze の力だと言える。<sup>4</sup> 作中で Haze はたびたび本音を漏らす。“Listen here,” Haze said, “you get

---

<sup>4</sup> 山辺省太『フラナリー・オコナーの受動性と暴力——文学と神学の狭間で』では Haze の神を探究する能動的な態度はオコナーがのちに忌避した人物造形であり、「神の啓示が浮上するまでのナラティブは評価の高い短編作品と比べて見劣りするという印象は拭えない。」(64) と *Wise Blood* が評価されて

away from here. I've seen all of you I want to. There's no such thing as any new Jesus. That ain't anything but a way to say something” (158). この「新しいイエスなんていうものは存在しない。ただなにかを言いたいただけなんだ」という Haze のセリフからは、神を探究するだけでなく、自分の居場所を無くした人間の、信仰を凶器のように振り回しながら必死に抵抗を続けた姿を読み取れるのではないだろうか。

### おわりに

本論では登場人物たちの家族の喪失を概観し、O'Connor 作品における開かれたグロテスクの可能性を検討した。そして、Haze はイエスへの失望に対抗する *fundamentalist hero* として最後に花ひらいただけではなく、土地や家族によって自分に植え付けられた価値観を現実に適応させようともがいている姿は彼のもうひとつの達成なのではないかということを示した。信仰との格闘は、信仰自体の要請として生まれたものではなく、疎外された人間の必死の抵抗と考えられるのではないか。

短編“The Train”から *Wise Blood* (Ch.1) のもうひとつの改変は、地名の言及である。“The Train”では地名が登場人物の会話に多く登場するが、*Wise Blood* ではフロリダとシカゴ以外登場しない。“The Train”では Evansville, Chattanooga など 10 以上の地名が書き込まれているが、*Wise Blood* では 5 つ程度にその数は減らされている。また前述したように、Haze は短編では母の名前を繰り返すが、長編では名前自体が削除されている。つまり“The Train”において描かれていた故郷と家族喪失の Haze 個人の特有の悲しみは、*Wise Blood* においては抽象化されたノスタルジア<sup>5</sup>を追い求める原動力として変換されている。そして、すでに失われているゆえに、克服することも抜け出すことも困難なノスタルジアを現実と一致させるために Haze はもがき苦しむ。そうした苦しみの帰結である彼の死は、他者に救済をもたらすかもしれないのだ。

本論考の中心的な目論見は、*Wise Blood* をもう少し俗っぽく読み直す、ということにあった。先行研究においては、大抵が Haze が神性に向かうということが自明であるという前提で論が進んでいた。オコナーが神を前提として小説を書いていることは当然であると言えるだろう。しかし Haze——家族と故郷を失った 19 歳の少年——はその限りではない。故郷も家族も失い、身体的にも欠損した Haze の姿は、われわれの心にひとすじの光を与えるのである。

---

いる。Haze の振る舞いを神の探求に焦点を当てて評価するとこのような評価になることは否めないが、本論では違ったアプローチを試みたい。

<sup>5</sup> Stewart が *On Longing: Narratives of the Miniature, the Gigantic, the Souvenir, the Collection*. において “Nostalgia is a sadness without an object...like any form of narrative, is always ideological: the past it seeks has never existed except as narrative, and hence, always absent, that past continually threatens to reproduce itself as a felt lack. (24)” と提示するように、ノスタルジアは欠損の感覚を引き起こす。

## 参考文献

- Botting, Fred. *Gothic*. Routledge, 1996.
- Brinkmeyer, Robert. *The Art and Vision of Flannery O'Connor*. Louisiana State UP, 1989.
- . "Jesus, Stab Me in the Heart!: *Wise Blood*, Wounding, and Sacramental Aesthetics." *New Essays on Wise Blood*, edited by Michael Kreyling. Cambridge UP, 1995, pp. 71–89.
- Cash, W. J. *The Mind of the South*. Vintage Books, 1991.
- Coles, Robert. *Flannery O'Connor's South*. U of Georgia P, 1993.
- Edmondson, III, Henry T. *Return to Good and Evil: Flannery O'Connor's Response to Nihilism*. Lexington Books, 2005.
- Evans, C Robert. *The Critical Reception of Flannery O'Connor "Searchers and Discoverers."* Camden House, 2018.
- Feeley, Kathleen. *Flannery O'Connor: Voice of the Peacock*. Rutgers UP, 1972.
- Fitzgerald, Jonathan D. "This Protestant World: Flannery O'Connor's Portrayal of the Modern Protestant South in *Wise Blood*." *Wise Blood: A Re-Consideration*, edited by John J. Han and John J. Hanchar. BRILL, 2011, pp.25–41.
- Giles, Paul. *American Catholic Arts and Fictions: Culture, Ideology, Aesthetics*. Cambridge UP, 1992.
- Gooch, Brad. *Flannery: A Life of Flannery O'Connor*. Little, Brown and Company, 2010.
- Kubo, Naomi. "Living in the Shocking Moments: Hazel Motes in Flannery O'Connor's *Wise Blood*." *Renya5*, 2014. pp.39–58.
- O'Connor, Flannery. "Good Country People," *The Complete Stories*. Farrar, Straus and Giroux, 1971, pp.271–291.
- . "The Train." *The Complete Stories*. Farrar, Straus and Giroux, 1971, pp.54–62.
- . *Wise Blood*. Farrar, Straus and Giroux, 1962.
- Shloss, Carol. *Flannery O'Connor's Dark Comedies The Limits of Inference*. Louisiana State UP, 1980.
- Smith, Marcus A. J. "Another Desert: Haze Motes's Missing Years." *The Flannery O'Connor Bulletin*, vol. 18, 1989, pp. 55–58.
- Stewart, Susan. *On Longing: Narratives of the Miniature, the Gigantic, the Souvenir, the Collection*. Duke UP, 1993.
- Watson, Jay. "Women Writers and the Southern Renaissance; or, the Work of Gender in Literary Periodization." *A History of the Literature of the U.S. South*, edited by Harilaos Stecopoulos, vol. 1, Cambridge UP, 2021, pp. 227–243.
- Westling, Louise. *Sacred Groves and Ravaged Gardens*. U of Georgia, 1985.
- Wood, Ralph C. *Flannery O'Connor and the Christ-Haunted South*. Kindle ed., Erdmans, 2004.
- Yaeger, Patricia. *Dirt and Desire: Reconstructing Southern Women's Writing, 1930-1990*. U of Chicago P, 2009.
- . "The Woman Without Any Bones: Anti-Angel Aggression in *Wise Blood*." *New Essays on Wise Blood*, edited by Michael Kreyling. Cambridge UP, 1995, pp. 91–116.
- 井上一郎『アメリカ南部小説論 フォークナーからオコナーへ』彩流社、2012年。
- 柳生望『アメリカ文学と終末の世界』ヨルダン社、1972年。
- 山辺省太『フラナリー・オコナーの受動性と暴力——文学と神学の狭間で』彩流社、2019年。

